

タイトル	物語理解に含まれる一般的言語的コミュニケーションの原型について()
著者	小島, 康次; KOJIMA, Yasuji
引用	北海学園大学学園論集(150): 1-10
発行日	2014-06-25

物語理解に含まれる一般的言語的 コミュニケーションの原型について (XI)

小 島 康 次

10. ラカンの精神分析からみた言語とコミュニケーション

10. 2 フロイトの『夢判断』からラカンの〈現実界〉へ(2)

(10. 2. 1, 10. 2. 2は前号に収録)

10. 2. 3 反復と転移

西欧思想の中に「主体」という概念を導入したのはフロイトではなくデカルトだとラカンは言う。そして、主体にとってもっとも重要な言葉は“Gewißheit” すなわち「確信」であるという。フロイトはこの確信の主体というものを出発点としている点でデカルト的なのである。デカルトが「我思う、ゆえに我あり」と言う時、その前提として「我、疑うことによりて、思うことを確信す」ということが暗に含意されている。この点においてフロイトとデカルトの間には共通項が見られる。

フロイトにあっても、デカルト同様、疑うことこそが確信の支えとなっている。何かの疑いがあるということは、すなわちそこに、隠しておくべき何かがあるという印だと考える。隠すべき何かの印とは分析の過程における「抵抗」の印のこともある。抵抗とは、治療作業を妨害して、主体の無意識的な原因への接近を妨げるものを指す概念である。主体があまりに病因となる核心部分に近づき過ぎて、それ以上深く葛藤の把握を進められなくなった時、主体は分析家に向けて親密な（陽性）感情あるいは攻撃的な（陰性）感情を転移という形で実現する。転移はその時、抵抗として機能し、そこで主体は自分を妨害するものを反復するとされる。

転移と反復とはどのような関係にあるのか。フロイト（1914）は、反復を分析作業における想起（無意識的原因を思い出すこと）に対する抵抗として捉え、転移は反復の一部であると考えていた。そして、反復は抑圧されているものを源として、実現し得ないでいたさまざまな精神的態度、病的性格特性などを再現することだとされた。しかし、フロイト理論の前期と後期を画然と区別する著作、『快感原則の彼岸』（1920）において、無意識は治療の努力に抵抗するのではなく、意識に達しようとする、あるいは実際の行動によってそこにある何かを放出しようとするだけのものだ、とされる。この新たな定式化は何を意味するのだろうか。2. 1. 1で述べたように、フロイト（1920）は反復を、たとえば第一次世界大戦からの帰還兵にみられた戦争神経症におけ

る悪夢（現在であれば、PTSDに相当する症状）のように、それまでの快感原則とは異なる説明原理、すなわち罪責感の代価を支払うことによる負荷の軽減という一般的機能によって意味づけようとした。しかし、戦争という悲惨で不快な体験をどうして反復的な仕方では意識化することが繰り返されるのだろうか。

主体がもはや耐えることのできない事態に遭遇した場合、それは心的外傷として主体を脅かす原因となる。主体はそれを象徴化することによって何とか理性的なレベルに落ち着かせようと試みる。それがイメージや、夢、行為化といった不快な経験の反復なのだフロイトは考えた。それは主体にとって外傷という恐ろしい怪物を飼い馴らし、鎖に繋ぎ檻に閉じ込める戦いだと言えるかもしれない。しかし、この挑戦は残念ながら常に成功するとは限らないことも知られている。反復は多くの場合、その激しい戦いにもかかわらず、使命を果たさぬまま、絶え間なく繰り返される運命にある。しかも、クライアントの意図と関係なく自動的に繰り返されることから「反復強迫」と呼ばれ、無駄な試みでありながら、何とかそうした事態を耐え忍ぶぎりぎりの試みでもある。

先の節で述べたように、反復とは前期フロイト理論の柱であった「快感原則」とは全く別の原理に基づくものであることが見て取れる。反復へ向かう強迫的な傾向は快感を求める欲望への応答とは考えられないのである。それでは反復とは何か。反復は一方で無意識の脅威を意識化することにより、心的な外傷の脅威を軽減する機能を持ちながら、他方、それ自体、外傷を象徴化することに対する無意識の抵抗として働くという、相反する性質をもっている（フロイト、1926）。前期フロイト理論を支える快感原則は人間を含む動物の系統発生と個体発生の両方を貫く、いわば本能的原理と言ってもいい根本的法則である。したがって快感原則は心理学的な原理であると同時に生理学的な原理でもある。その意味で初期の精神分析は期せずして自然科学的色彩の濃い性格を有していたと言えよう。

精神分析を自然科学を超える審級へと変貌を遂げさせたのはフロイトの天才であるが、それを転移論に位置づけるまでには至らなかった。この自然科学を超える新たな審級こそ、直系の弟子達から無視され、ラカンによって漸く受け継がれた「死の欲動」という概念だった。

10. 2. 4 ファルスとシニフィアンの網

10. 2. 1で述べたように、反復という現象が快感原則をしのいで、より以上に根源的なものであるというフロイトの直観の源を論じることは後知恵に過ぎない。比喩的に言えば、自然科学を超える審級は、フロイト理論に翼を与え、地上から空中へと舞い上がらせたのである。後に言語学者によって定式化された記号論の片鱗がすでに後期フロイト理論に見られるのは驚異である。この死の欲動と名付けられた審級を特徴づけるためにフロイトが行った「外傷」の概念化は次のようなものだった。まず、最初の外傷は出産時のものであり、生きるということに内在する外傷体験である。生きるということは、誕生以前の生命のない状態、すなわち死に再び戻るため

の迂回であり、反復とはこの根源的で構造的な外傷の痕跡なのだという。言い換えれば、生きるということは成長すること（前進）であると同時に、母胎への回帰、すなわち死へと後戻りすること（後退）でもある。

ラカンはフロイトを受け継いでさらに反復の概念を洗練させた。ラカンがまず指摘したのは、反復というのは象徴的秩序に基づくシニフィアンの連鎖のルールに従うものだというのである。シニフィアンの連鎖のルールとは何か。精神分析学では、自我と主体は一致しない。ラカンによれば主体は自我が生まれると同時に消失するのであり、この主体の状態を「斜線を引かれた主体」と呼ぶ。シニフィアンが最初のシニフィアンにおいて消失している、その消失が外傷の始原を意味することと軌を一にする。シニフィアンが最初から消失しているというのは、人が言語の秩序に参入する時点で遡ってみなければ理解できない。フロイトはこの事態を原抑圧と定義した。原抑圧とはシニフィアンをエスの中に押さえ込む作用であり、それによって主体は分裂し、その後のシニフィアンの抑圧と絶え間ない回帰が生じるのである。無意識とはこのシニフィアンの参入によって初めて生じるものである。言い換えれば、抑圧の起源はシニフィアンが意識から隔絶されるところにある。

それでは、なぜ人間にのみ原抑圧のような特異なプロセスが生じるのだろうか。フロイトによれば、人間が子宮の中にいる期間は他の霊長類に比して短く、未熟なまま生まれるのだという。これはポルトマンによって提唱されて生理的早産説とも符合する。本来であればもう一年、母胎に居つづけなければならなかったヒトの胎児は、二足歩行のために子宮口が狭くなった母親から、未熟なまま早産状態で生まれ出る宿命を背負ったとされる。寝たきり状態の新生児は他の高等哺乳類の子どもと比べても格段に無力であり、外界の危険にさらされる度合いも大きい。この出生時の「寄り辺無さ」が未熟な新生児にとってその存在が不可欠な母親への愛着の強さを生みだしたとされる。

絶対的な無力状態に対して用意された母の乳房や体温は、乳児にとって胎内の延長上にある楽園だったかもしれない。それは対象愛というよりも自体愛（一次的ナルシズム）というべき状態であろう。しかし、ほどなくそうした楽園からの追放劇が始まる。母親は女性としてのファルスに対する欲望（性欲）を子どもに対する欲望に転嫁することにより、自分がファルスをもっているという幻想を抱くに至る。また、子どももそれに同期して、自分は母親のファルスであると信じることにより、想像的關係が形成される。母子一体という事態は無条件に可能なのではなく、このファルスを介して辛うじてなされる。ファルスとは実体として存在するペニス（男性器）とは全く異なり、飽くまで表象的なものであり、実体とは無縁のものである。

楽園からの追放とはこのファルスを媒介とした母子一体のナルシズム的絆が分離することを指す。精神分析の用語でこの分離によって生じる切れ目のことを去勢と呼ぶ。この去勢によって子どもは母親の想像的ファルスの位置から脱し、父性的世界すなわち象徴界へと参入することになる。パロール（話し言葉）はこの去勢を遂行する上で決定的に重要な役割を果たす。ファルス

と去勢に関するフロイトとラカンの理論には以下のような若干の相違がある。ラカンに焦点を当てて特徴を挙げると、①去勢とは母子関係に切れ目を入れる行為である、②この行為の対象となるのは想像的ファルスであり、想像的ファルスは、母親がもちたいと望み、子どもが同一化する対象でもある、③去勢とは父親が引き受けるべき行為であるが、ここで言う父親とは実際の人物のことではなく、父性的な言葉(パロール)によってなされる象徴的操作のことである。無意識は、この象徴的なシニフィアンと同時に生じ、言語活動(ランゲージュ)として構造化されるのである。

10. 2. 5 <現実界>と「対象a」——語りえぬもの

人間が人間であるための第一の条件は前節でみたように象徴的去勢ということである。この去勢の結果、われわれは言語によって分節化された世界のなかに自らを位置づけられる。そして、それ以前の情念の世界とは画然と区別された世界の住人となる。ラカンはこの象徴的去勢前の世界を想像界、去勢後の世界を象徴界と名付けた。しかし、人間の生きる世界はこれら二界に止まらない。実は、想像界、象徴界から決して到達できない領域があるとされる。それは人間が生物として生じた身体そのものの領域であり、生命の運動を生み出している領域である。われわれはこの領域の存在をただ予測するのみであるが、この領域なしでは想像界も象徴界もあり得ず、生物としての人間の存在そのものの基盤すら失われてしまうのである。

この領域こそラカンが<現実界>と名付けた領域である。以前、ポロメオの輪という図式で示したように、これらの三つの世界は互いに絡み合い、支え合っていて、そのうちのどれ一つが欠けても人間精神は成り立たないのである。順序から言えば、人間は現実界に生まれ、想像界という欲望の交錯する情念の世界に投げ込まれ、象徴的去勢を被ることによって、永遠に満たされることのない欲望が象徴界というシニフィアンの連鎖において反復される。

1960年代以降、ラカンは<現実界>に焦点を当てた議論を深める。例えば、最初シェーマLにおける小文字の他者aとして用いていたaという文字を、新たに想像の対象を表わす「対象a」という現実的なものに根差す概念へと衣替えさせた。

対象aとは何か。敢えて言えば、一つの無を書き込まれることによって生じた穴である。また、在ろうとして在り損ねたものに与えられるイメージのようなものである。それは消去された主体とどこが違うのか。aは元来大文字の他者(A)のつけた傷跡として登場させられた。主体に斜線が引かれて有が失われ、それが S_1 によって代表されることで象徴的な世界に登場した時、 S_1 は S_2 へと主体の無を引き渡し、 S_2 は主体の無を世界へと開く役目を果たそうとするようになる。しかし、 S_2 が主体の何たるかを雄弁に語ろうとすればするほど、語りえぬ、欠けた空無の領域はその版図を広げていくというパラドックスに見舞われる。

元々、主体の成立における余剰物として要請されたはずの対象aは、言語と主体の不可能な関係を補うために、欠落した存在の不均衡を補完するものとして成立したものだった。対象aの位

置する場所は、本来、主体が存在したところであり、斜線を引かれる以前は楽園だったところである。去勢の瞬間に余剰なるものとして斜線を引かれた主体のもとを離れ、私でありながら私ではないという存在の不可能性を背負うことになった。象徴的に語れば語るほどそこに生み出される語りえぬ不可能な剰余物の存在をラカンは現実的な（〈現実界〉に根差す）ものとして敢えて概念化したのである。

痛みを例にとれば、主体は痛いという個人内に閉じた感覚をそのまま他者に伝達することはできない。それが可能となるためには、個人的な感覚であった痛みを痛いという概念によって意味づける必要がある。しかし、そうした語りによって他者に伝達された痛みはもはや、最初に体感した痛みそのものとは異なる次元に属するものであろう。もし主体が自己の語りえぬ痛みの体感を失うことを拒否してじっと耐えることを継続したならば、閉じた感覚そのものは失われることなく保持されるのだろうか。

ヴィトゲンシュタインの言う語りえぬものも、最初からそこに存在したものを指すのではなく、語ることによって失われる何ものかのことであり、語ることによって初めて生じるような語りえぬもののものであろう。語りえぬものは語ることによってこそ増殖し、主体を脅かすものであり、主体はこの語りえぬ不可能なものから身を守るために自己と無縁の彼方へとそれを排除するメカニズムを必要とする。それが父の言葉によって語られるという受身性を獲得することであり、それによって辛うじてわれわれは象徴的な意味世界に踏み止まることが可能となる。

11. 創造性をめぐる対話とコミュニケーションの理論

11. 1 創造性と想像の循環モデル

ヴィゴツキーは想像力が創造性に及ぼす影響について次のように述べる。想像の創造的構成物は、まず現実経験を材料にしたものである。次に、そうした要素は人間の内面において、概念的思考と感情の複雑な組み合わせにより加工され、結晶化されることによって、新たな現実の存在物となる。このように、想像力が創造活動において果たす役割は、現実を出発点としながら内的なプロセスを経て、再び現実に回帰する循環運動を構成しているのである。言い換えれば、想像を媒介にして、具体的なものが抽象的なものを經由して、新しい具体的なイメージを構成することになる。これは科学技術的な知においても、芸術的な作品の創作においても同様であり、現実に始まり現実に還ることが想像による創造活動の必然的過程であり、暗黙知とはまさにその途中にある概念的思考と感情との複雑なコラボレーションを指すものであると考えられる。

前章で論じたラカンの精神分析を中心とする言語への記号論的アプローチが、人間精神の構造をネガティブな面から解きほぐす道筋だとすれば、本章におけるヴィゴツキーの言語と記号に関する弁証法的な関係性に関する議論は、健全な発達現象から人間精神のあり方を探求する方途だと言える。

11. 1. 1 感情システムと概念的思考のコラボレーション

想像力を現実とは異なる虚構世界にまつわる活動の源とみる見方を批判して、発達心理学者ヴィゴツキーは独自の想像論を展開する。ヴィゴツキーによれば想像は虚構であるどころか、それこそが現実認識に不可欠な心理過程であると言う。なぜなら現実世界の現象は無条件にその本質を顕にするものではないからである。科学とはそうした現象の背後に隠された本質を見抜く活動であり、その中心となるのが想像であると言う。素朴な実証主義における観察の重視とは一線を画する想像の重要性を説いたヴィゴツキーの見方が、20世紀初頭の時代において、いかに先見性に富んだものであったかは言うまでもない。

想像とはどのような活動なのだろうか。ヴィゴツキーはその初期の著書において、想像は過去に経験した記憶の断片を思い浮かべるのではなく、そうした材料からまったく新しい組み合わせによって新たなイメージを生み出す過程であると述べている。これはまさに想像の創造的側面を表していることはすでに述べた通りである。想像がイメージを生み出すとはどのような事なのだろうか。ヴィゴツキーは、想像のイメージと感性的経験との関連性について次のように述べている。第一に、想像のイメージは現実的経験に基礎をもっていて、想像活動の豊かさは過去経験の豊かさに依存していること、未経験のことを理解する際にも、すでによく知っている経験に基づいてイメージが形成されること等である。第二に、想像のイメージは、内的表現としての感情との繋がりを強くもっていることである。この時の感情は内的表現としての感情であることから、現実的であることは必要であるけれども、必ずしも実際の感情体験（外的表現）のことを指すわけではない。架空の物語であっても感動した際に感じる感情は本物でありニセモノではないのである。これらのことから、ヴィゴツキーの想像による創造性の活性化においては、感情システムと身体的認知がとりわけ重視されていることが分かる。

想像という活動は現実とかけ離れた空想世界を構成するようなものとは対極的な、現実の経験に根差したものだと言えよう。したがって、その構成要素である知覚や記憶のイメージも決して荒唐無稽なものではない。しかし、過去のイメージをそのまま再現するようなものではないことも先に述べた通りである。イメージのような、いわば情報量の豊富なアナログ的な材料を、その時々文脈や目的によって柔軟に組み替えるようなことが果たして簡単にできるものなのだろうか。この問いに答えるためにヴィゴツキーは概念的思考、すなわち言語の機能の重要性に着目する。そのエッセンスは主著『思考と言語』において明瞭に展開されているように、イメージを柔軟に操作するには言語の働きが不可欠なのである。他の動物、とりわけ人間に近いとされる類人猿の知的能力はサルなどに比べても格段に高度なものであることが知られているが、如何せんそのイメージ能力は限定されたものでしかない。生物学的にヒトと極めて近いにもかかわらず、チンパンジーとヒトの間の大きな相違は何に由来するのだろうか。ヴィゴツキーの答えは容易に推察されるように言語である。

この言語の役割の重要性を論証するためにヴィゴツキーは、子どもとオトナ、健全なオトナと

失語症のオトナの相違を例として取り上げた。イメージの新しい組み立てによる創造的活動のためには、情報量の多いイメージを言語化することによって軽くし、内的な操作の自由度を高めることが必須である。そうした自由度を確保するには、言語による概念的思考システムが発達していることが条件となる。その意味で、概念的思考能力の未熟な子どもよりオトナ、また、概念的思考の道具である言語に疾患を抱える失語症者よりも健常な人が想像による創造的活動を効果的に行うことができると考えられる。一般に言う、子どもの豊かな想像力（ファンタジー）という一種の神話はヴィゴツキーの理論とは無縁である。

健常者と失語症者との相違についてみると、失語症者は概念的思考を司る脳の部位がダメージを受けている場合、言葉による内的自由を確保することに困難が生じるという。彼らは目の前の現実場面に強く拘束されているために、直接の知覚に対応しない事を言語的に表現することができなくなる。たとえば、目の前の人が赤い帽子をかぶっているのを見ながら、「青い帽子をかぶっている」と言うことができなくなる。単純にその言葉を復唱することすらできなくなるのである。これは、言語中枢に障害が生じると概念的思考のメカニズムの機能が不全に陥り、知覚や思考が目の前で起きている具体的状況に強く拘束されるために生じる現象である。すなわち、概念的思考が不全に陥ると、同時に、想像の機能も不全に陥ると考えられる。ヴィゴツキーはこのことを、失語症患者は具体的な意味から自由になることができず、したがってその意味から想像をふくらませて、新しい創造的意味を生成することが不可能になる、と述べている。そして、健常者においてそれが可能であるのは概念的思考であり、それこそが創造的思考を可能にするもっとも重要な要因であると言う。

11. 1. 2 想像力に対する感情の役割

感情が昂ぶるとそれに伴って様々な生理的状态が活性化されることが知られている。その因果関係についてはむしろ生理的要因を重視する立場も少なくない。その最たるものがジェームズ＝ランゲ説であろう。一時期ヴィゴツキーもこの説に同意していたことがあったほどである。「悲しいから泣くのではなく、泣くから悲しいのだ」という有名なテーゼは、しかし、後々、ヴィゴツキーによっても批判的に捉え直されるようになる。ヴィゴツキーは、感情は外的・身体的表現(生理的要因)に劣らず、内的・心理的表現も持っている指摘し、それを感情の二重性と呼んでいる。感情はその心理的表現において、その感情に合致するイメージに具象化されると言う。言い換えれば、感情によってイメージが選択されるのである。したがってヴィゴツキーは感情のこのようなイメージに対する機能に対して「情動的記号」という呼び名を与え、感情が媒介となってイメージが喚起されたり、イメージ同士が結合したりする際の法則性を「共通の情動的記号の法則」と名づけたのである。

同一の感情反応をとまなう表象は互いに連結されやすい。喜怒哀楽や様々な派生的な情動同士の間には合理的な関係はないが、それらと一緒にもたらされたイメージは、共通の感情的色合いを

もつという理由によって互いに結合される。ここでもヴィゴツキーは概念的思考における失語症者の例と同様の議論を自閉症スペクトラムの患者を例に次のように論じる。いわゆる自閉症児が示す問題は情緒的なものが中心となっていて、他者の感情が読めなかったり、言葉の意味の背後にある文脈（皮肉、ジョーク）が読み取れなかったり、興味や関心が偏ったりと、結果として想像力の欠如をとともなうものであると言う。したがって彼らは想像力を必要とする遊び（ごっこ遊び、グループ演技、創作活動等々）に困難を感じるのが通例である。これらのことから感情が想像力と密接に関連していることが容易に見て取れるのである。

11. 1. 3 概念的思考と感情が融合して心理システムとなる

想像力が新しいイメージを創造的に構成する際に、概念的思考と感情の二つがともに重要な働きをすることが分かった。それでは、これら二つの要因はどのように互いに影響し合うのだろうか。想像は単一の要因によって説明できるようなものではなく、心理活動の複雑な形式と見なすべきであるとヴィゴツキーは言う。そして感情の要因はイメージの主観的な構成に対応するのに対し、概念的思考はイメージの客観的構成に対応すると言う。もし、感情の支配によるイメージだけが喚起され、無限定な活動を繰り返すならば、それは自由かつ奔放な夢に近しいものとなり、個性的ではあっても必ずしも創造的なイメージとはならないであろう。他方、言語的思考やそれを支える概念的思考によって喚起される想像力は抽象的で論理的な形式において構成されるが、それだけでは体系的な論理の外にある偶然的要素や非論理的な形式による構成物とは繋がることのできない。二つの想像力は乳幼児期から児童期を経て思春期に至る発達のプロセスにおいて互いに関連性を高め、複雑な心理システムへと変化すると考えられる。

幼児期は相対的に概念的思考が未熟であるために、感情的な想像力が優位になりがちであり、オトナから見ると自由で個性的なファンタジーを特徴とするイメージの様相が見られる。児童期は学校教育を通して概念的思考の体系を学びつつ、二つの想像力が複雑な体系を形成して心理システムを構成していくプロセスであると考えられる。思春期に至って、心理システムは体系としての完成度を高め、想像力はここでようやく真の意味での創造性を発揮することができるのである。このことをヴィゴツキーは次のように述べている。空想の発達が思春期において互いに分離するという見方（例：C.ビューラー）は正しくなくて、空想の具体的モメントと抽象的モメントは複雑に絡み合って心理システムの完成へと向かうのである。これは、主観的機能と客観的機能の間においても同様である。このように、内言の意味世界をヴィゴツキーが提示した想像のイメージとして見るならば、想像という心理機能を媒介にして、個人の内的世界を独自のものとして具体的に把握すると同時に、それが創造性に繋がる道筋を明らかにする可能性が開かれるのである。

11. 2 対話的思考と創造性

11. 2. 1 発達の最近接領域と創造的協働

共に学び教え合う関係を表す用語としてヴィゴツキーの「発達の最近接領域説 (Zoon of proximal development)」(ZPD と略称)がある。これは、本来、教師や先達が弟子や後輩に対して、彼らも持っている知識や技能に関するヒントを与え、それが弟子や後輩のモチベーションを喚起して、やがて自力でその知識や技能を用いることができるようになるプロセスを表す独特の用語である。アメリカの教育学においては1990年代からもっとも重要な学説として認められてきたものであり、ZPD という略称はキーワードとして定着していると言っていいであろう。

さて、このZPDを拡張して考えるならば知識や技能のレベルが異なる者同士の教授—学習関係だけでなく、どのような二人の間であっても同様の「教える—学ぶ」関係が成立することが容易に想像できる。全く同じ知識や技能を持つ人間がいない以上、どのような人間同士の間にも互いの違いがダイナミックに作用して新たな「学びの場」が生じることは当然であり、そこに必要なものは専門的な知識や技能そのものよりも、共に教え学び合うという開かれた態度と循環的な交流であることは論をまたない。

ジョン・スタイナー (2000) は、創造的な仕事をしている人が他者とのパートナーシップを重視することに着目してそれを「創造的協働」と名づけ、伝統的な個人主義的発想を克服して、相互に互いの発想をぶつけ合う過程を定式化した。そして、この概念は創造活動が社会的な活動であるとするヴィゴツキーの文化—歴史的理論に依拠しているとされる。つまり、創造的な想像イメージの機能は歴史的経験や社会的経験の作用によって支えられていることをヴィゴツキーの理論ほど明瞭に定式化した理論は他に見当たらない。

11. 2. 2 創造性のシステムモデル

ヴィゴツキーの定式化と期せずして軌を一にする創造性に関する理論がチクセントミハイ (Csikszentmihalyi, M., 1997) によって提唱された。チクセントミハイによれば、創造性は個人の頭の中に閉じたものではなく、個人の思考と社会文化的コンテクストの相互作用の中で生じるものであると言う。彼は、創造性を「個人」「ドメイン」「フィールド」の三つの部分からなるシステムと見る。ドメインとは一連のルールや手順からなる領域で、それが文化を構成していると考えられる。フィールドはあるドメインを管理する個人を含むところの「場」とされる。個人が当該のドメインの記号を用いて新しいアイデアを表明したとすると、彼が属するフィールドにおいて、それがそのドメインに含まれるべきかどうかを検討され、そこで認められて初めて創造性として認知される。

チクセントミハイは、フィールドが創造性に及ぼす影響について次のように述べる。第一に、フィールドが受け身的な進取の場であり、斬新さが求められるのはもっぱら後者の状況であると言う。第二に、斬新さを選択する際に、狭いフィルターを選ぶか、広いフィルターを選ぶかとい

う違いである。保守的なフィールドは新しいものに対して慎重であり、新しいものを僅かしか許容しないのに対して、自由なフィールドでは、新しいアイデアをどんどん許容する結果、そのフィールドは急速な変化を遂げる。第三に、他の社会システムと結びついて自らのドメインに新しい要素を導入することで、このフィールドの斬新さが奨励されることになる。